# 剣道について

堀田　啓祐
（西村俊範ゼミ）

目次

はじめに

第一章　剣道の歴史
〔1〕剣道の理念
〔2〕日本刀の出現
〔3〕幕末期～現代において

第二章　過去から現在までの剣道の変化
〔1〕武士道の理念
〔2〕騎士道と武士道の違い
〔3〕武術から武道への変遷
〔4〕殺人剣から活人剣への移り変わり

第三章　剣道のグローバル化
〔1〕文化や宗教などによる諸外国での「剣道」の考え方の違い
〔2〕グローバル化の問題点
〔3〕韓国剣道 KUMDO について

終わりに

## はじめに

私は日本文化の代表的なものとして『剣道』について調べてみた。

剣道を論文の題材として取り上げた理由として、1つは私自身が過去に剣道を習っており、興味を持っていたこともありより深く剣道について知りたいという気持ちを持ったからである。2つ目は私の学部が日本の歴史や文化などに関わる学部ということで、その国々の民族性、宗教観の違いによって同じ『剣道』でも考え方、捉え方の違いが生まれてくることを知り、そのことに興味、関心を持ったからである。

研究内容として、剣道、武士道などの書物、文献などを参考にし、剣道のグローバル化などを専門に書かれている論文なども参考に論文作成を進めていこうと思う。

## 第一章　剣道の歴史

### 〔1〕剣道の理念

剣道は剣の理法の修錬による人間形成の道である。

剣道修練の心構えは剣道を正しく真剣に学び心身を錬磨して旺盛なる気力を養い、剣道の特性を通じて礼節を尊び信義を重んじ誠を尽して常に自己の修養に努め、以って国家社会を愛して広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである。

従って剣道の修行においては、以上のことを常に念頭におき、修行し、世間一般生活においてもさすが剣道をやっている人は違うな、と思われるような人間を目指すことが大切であるということが目的とされている。

### 〔2〕日本刀の出現

剣道の歴史を遡るとき、欠くことのできない基本的な段階がいくつかある。

その源は日本刀の出現である。

彎刀で鎬（しのぎ）造りの刀は日本独特で、平安時代（794 ～ 1185）の中頃に出現した。その原形は日本列島東北地方に住み騎馬戦を得意としていた部族が平安初期には既に使っていたと思われる。以来、武士集団に使われ、日本最初の武士政権，鎌倉幕府末期に製作技術は飛躍的に進歩した。「鎬をけずる」といわれる剣の技は、日本刀とともに日本に生まれたものであると言っても過言ではない。

室町幕府（1392 ～ 1573）の後半、応仁の乱が始まってから約 100 年間、天下は乱れた。この頃

に剣術の各流派が相次いで成立している。1543年種子島に鉄砲が伝来した。日本には河床に沈積した品質の良い砂鉄があり、たたらぶき法で製鉄し、刀を鍛造していたが、短期間に同じ方法で質のよい鉄砲を大量に生産することに成功した。それによりそれまでの重装備の戦闘方式は軽装備の白兵戦へと大きく変化した。そうした実戦体験を踏まえて刀を作る技術の高度化・専門化が進み、洗練された刀法が確立され、新陰流や一刀流などの諸流派に統合されて後世まで継承されている。

太平の世が続き、剣術は実戦的な刀法から華麗な技がつくられていく中で、新たな基軸をうちだしたのが直心影流の長沼四郎左衛門国郷である。長沼は正徳年間（1711 ～ 1715）に剣道具（防具）を開発し、竹刀で打突し合う「打込み稽古法」を確立した。これが今日の剣道の直接的な源である。その後、宝暦年間（1751 ～ 1764）に一刀流の中西忠蔵子武が鉄面をつけ、竹具足式の剣道具（防具）を用いて打込み稽古法を採用すると、またたく間に多くの流派に波及した。寛政年間（1789 ～ 1801）ころには、流派の壁を越えて他流試合も盛んになり、強い相手を求めて武者修行をする者も相次いだ。

こうして江戸幕府後期には、「袋しない」よりも腰の強い「四つ割り竹刀」が発明され、胴もなめし革をはり漆で固めたものが開発された。俗に「江戸の三大道場」といわれる千葉周作の玄武館、斎藤弥九郎の練兵館、桃井春蔵の士学館などが勇名を馳せるのもちょうどこの頃である。千葉はまた、竹刀打ち剣術の技の体系化をはかり、打突部位別に技を体系化した「剣術六十八手」を確立した。千葉が命名した「追込面」や「摺揚面」など、多くの技名は今日でもそのまま使われている。

### 〔3〕幕末期～現代において

明治維新（1868）になり、新政府が設置されて武士階級は廃止され、続いて帯刀が禁止されたことにより失業者は激増し、剣術は下火になった。

その後、明治10年西南の役を契機に警視庁を中心に復活の兆しが見えはじめた。明治28年（1895）には、剣術をはじめとする武術の振興を図る全国組織として大日本武徳会が設立された。ほぼ同じころの明治に武士の思想の集大成とも言うべき『武士道』という書が英文で出版され、世界に影響を与えた。

大正元年（1912）には剣道と言う言葉が使われた「大日本帝国剣道形（のち「日本剣道形」となる）」が制定された。流派を統合することにより日本刀による技と心を後世に継承すると共に、竹刀打ち剣道の普及による手の内の乱れや、刃筋を無視した打突を正した。竹刀はあくまでも日本刀の替りであるという考え方が生まれ、大正8年、西久保弘道は「武」本来の目的に適合した武道および剣道に名称を統一した。

第2次大戦敗戦後、連合国軍の占領下におかれた日本で、剣道は抑圧されていたが、昭和27年（1952）独立回復後、全日本剣道連盟が結成されるとともに甦った。今日では、学校体育の重要な一部分を構成するとともに老若男女を問わず、庶民の間に拡がり、数百万人に及ぶ幅広い年齢層の愛好家が竹刀を持ち、ともに稽古に励んでいる。

また、世界各地で剣道を愛好する外国人も増え、昭和45年（1970）には国際剣道連盟（IKF）が結成され、第1回世界剣道選手権大会が日本武道館において開催された。平成24年（2012）5月にはイタリアのノヴァラにおいて第15回世界剣道選手権大会が開催され、48カ国・地域から選手が集まった。

## 第二章　過去から現在までの剣道の変化

### 〔1〕武士道の理念

もともと中世の時代には武士道という言葉は存在しなかった。しかし「弓矢取る者の習い」として道徳精神は存在した。彼らは、利と名を重んじ、その二つのものが武士にとっての判断基準として作用していた。更に言えば名は、利よりも命よりも尊ぶべきものであり、彼らはそのため死という事よりも、不名誉を最も避けるべきものとした。その最も顕著な例として切腹が行われていた。この自らの名を汚さぬための切腹は源平時代から始まったと言われている。また戦で命を落とす事は、名誉な事であり、多くの武士が死んででも名を上げたいと思っていた。また死の覚悟のなされていない者は、容赦なく蔑まれていた。彼らにとって名誉というのは、それほど重要なものであったの

だ。

また新渡戸稲造は、武士道の基本理念について「義」「勇」「仁」「礼」「名誉」などの言葉を使って説明している。

「 義 」: 正義の道理、また孟子によると義は路である。

「 勇 」: 義しき事をする事、義と同じような意味とされている。また、「勇」の行いとしては、北条氏が武田信玄の国の弱体化を謀り、武田氏との塩の交易を禁止した時、武田の敵であった上杉謙信は「我の公と争うところは、弓矢であり、米塩にあらず」として、武田側に塩を送った行為がこれに当たる。

「 仁 」: 愛情、寛容をあらわす。

「 礼 」: 社会的地位に対する正当なる尊敬を示す事。

「 誠 」: 誠実、誠実さ無くして礼はないという考え方に基づく

「名誉」: 行動の基準とされた。

そして彼らの行動には常に「武人階級の身分に伴う義務」というものが存在し、彼らは、その義務を全うしなければならないとされていた。また新渡戸稲造は、武士道は仏教、儒教、神道の影響をそれぞれ受けていると述べている。神道が武士道に与えた影響としては、他のいかなる思想によっても教わることのなかった主君に対する忠誠、先祖に対する崇敬、さらに孝心などをその教義によって武士たちに植え付けるというところにある。神道の祖先や神への尊崇は、天皇を神としたことで、武士に愛国心と忠誠心をもたらした。また仏教は、運命を受け入れる事、そしてそれは、死に対する親近感をもたらした。儒教については、その道徳観が参考にされた。この三つの宗教のなかから部分的につまみ、武士道はその思想を固めていった。

### 〔2〕騎士道と武士道の違い

騎士道と武士道の精神的内容には、共通点が多く見られる。

新渡戸稲造の「武士道」の中で、「際立った違いは、騎士道は封建制から離れたのち、キリスト教会に引き取られて、新たな余命を与えられた。だが、武士道はそのような庇護する大きな宗教がなかったことである。そのため母体の封建制が崩壊すると、武士道は孤児として残され、自力で生きなければならなかった」とある。

しかし一見似たように思われる騎士道と武士道、騎士道・武士道の違いには、騎士道・武士道が根付いた土地の文化体系が関わっていたと思われる。つまり我々日本人は、西洋人に比べて生活と宗教の関係が希薄なので、武士道と宗教の関係が騎士道とそれの関係より薄いものであったのではないだろうか。騎士道がそのよりどころの大部分をキリスト教に求めたものであったのに対し、武士道も一応、仏教、儒教、神道の思想と関わっていたものの、実際の武士たちにはあまり宗教が根付いていなかったとしたら、武士道は、それ自体に、武士にとって宗教としての役割があったのではないのか。その根拠として、佐賀県鍋島藩士、山本常朝が著した「葉隠」に、武士道をさす有名な言葉で「武士道といふは死ぬ事と見付けたり」という言葉があり、武士道と死が密接に関わっていた事が伺える。

しかし、もし武士道が仏教の死に対する概念をとりいれたのであったとしても、武士道における最大のテーマが死ぬ事にはならないであろうと思われる。

この死への特別な思いは、武士たちにとって一種の美学として発達したものである。武士たちは何よりも利と名を重んじる存在であったのだが、殉死する事により自分の名が世に留まる事を望んだ事によりこのような、宗教とは別の形で新しい道徳感が形成されていったのではないのだろうか。

以上の事より、私は、騎士道と武士道の一番の違いを、それらにおける宗教との関係性にあるといえると思う。つまり、騎士道が、ある程度キリスト教に則った形で変化したのに対し、武士道は宗教の枠を飛び越えていった物であるという点が両者の違いである。しかし、武士道にも宗教が関わっていた事や、騎士道も完全にキリスト教に沿って変化したとも言えない事は事実である。

### 〔3〕武術から武道への変遷

日本は、明治維新（1868）を迎えて、軍事的・

経済的に優勢な西欧諸国の文化と本格的に遭遇し、その受容をはかる中で、伝統的文化の変容を迫られた。特に明治維新当初の数年間は、剣術などの武術は役に立たない無用のものとして軽視されたが、1880 年代後半からの武道復興の気運と国家主義的社会風潮のなかで、武道を学校教育のなかに採り入れようとする動きが活発化した。1890 年代から 1920 年代にかけて、このような武術を近代体育システムに取り込もうとする努力と、精神性を加味した「道」の思想を強調することによって、撃剣あるいは剣術という呼称は剣道となり、弓術は弓道となり、そして、総合名称としての武術あるいは武芸も武道と呼称されるようになった。その先鞭を付けたのは嘉納治五郎である。1882 年に柔道の創始者嘉納は、自らの柔術を柔道と名付けた。したがって議論の出発点として、嘉納治五郎における道の概念を明確にする必要がある。

嘉納は 1932 年に南カリフォルニア大学で行った「教育における柔道の貢献」と題する講演で、自らの「道」について説明している。「講道館の字義は、「道」を教える「塾」というのであって、「道」とは、生活のみちを意味する。筆者の教えるものは、柔術ではなくて柔道である。まず、これらの言葉の意味から明らかにする。「柔」とは、柔らかい又は、譲るということを意味する。「術」とは技術又は実践を意味する。けれども、「道」とはみち又は原理［principle］を意味する。故に「柔術」というときは、柔によって勝つ技術であり、又は、始め譲って終局において勝つ手段の実践をいう。ところが、「柔道」というときは、その勝つためのみち又は原理をさすのである。」嘉納は、この「柔道原理」を人間のあらゆる活動に応用可能な根本原理として、「心身の学であり、訓練である」と同時に「生活並びに事務の規範である」とした。柔道は、原理探求の科学であり、勝つための訓練であり、また、人間生活（人生）の指針・規範と定義したのである。

このような人間の総合的な指導原理としての柔道の定義は、1915 年頃からのものである。嘉納は 1922 年に、柔道をもって社会貢献する組織、講道館文化会を設立し、その綱領に「一、精力の最善活用は自己完成の要訣なり、一、自己完成は他の完成を助くることに依って成就す、一、自他完成は人類共栄の基なり」の三項目を掲げた。文中に嘉納の柔道が、全人教育を意味する柔道であり、その「道」が、教育としての道であることが明らかである。

このような嘉納の思想は武道界に影響を与える。1889 年段階の嘉納は、柔道を「柔の理」（柔の徳）に基づいて勝ちを制するという「高尚な理論」を伴った修行と定義づけていた。その後この定義は、嘉納によってこれのみでは不十分とされ、上述の新しい定義に包摂されるのであるが、不十分とされる定義にも、現象から原理を抽象する思考を見出すことができる。嘉納は、旧来の武術や芸能の世界で考えられていた、「わざ」（技の修行）から「みち」（道理、人の行動の条理、精神的に高い境地）へ進むという伝統的思想に、西欧思想の原理・根本法則を探求するという意味を重ねてとらえた。嘉納思想のもつこのような近代性は、伝統思想としての「みち」に、原理の探求という近代的な普遍的価値を付与する魅力的なものとして、当時の人々に受け入れられたと思われる。政府が作り出した、近代化（西欧化）を肯定しそれに邁進する日本社会の基調に、日本人は無意識的に呪縛されていたからである。

嘉納が、柔術から柔道へ、つまり、術から道への解消をいわば進歩・発展として説明をするのであるから、「道」はすばらしいもの、高尚なものというイデオロギーが浸透していかないはずはなかったのである。 一方、1890 年代以降、伝統芸能である生け花や茶の湯が、それぞれ「華道」「茶道」という言葉に置きかえられて普及していた芸能の「芸道（技芸や芸能の道）」化現象がである。それは後述するように、中世以来近世で一般化した芸能や武術の世界が、それぞれの独自の道となる歴史を、敢えて道という言葉を付加して使用することによって明示化したものといえる。近代における道の明示化という作業は、伝統性を明示するという意味と同時に、近代性を刻印することを意味した。それは、それぞれの武術に「道」という言葉を付与することによって、「道」という言葉に含まれる高尚な伝統という意味とともに、個々の武術に同質性を与えたからである。武術は武道というカテゴリーに括られることによっ

て、むしろ多様性を抑制され、政治的に整序されることになる。 技の習得から出発した武術と人間教育とを結びつけて両者を目的とする柔道の思想と、伝統芸能の世界で起こっていたこのような現象との直接的な影響関係はわからない。しかし「技芸を媒介とする教育」という芸能との構造上の同質性は、近代において人々が武道という言葉を使用するに際し、違和感を払拭するに貢献したことは間違いない。柔道の成功と、華道、茶道の一般化が両者相まって他の武術に影響を与え、上述のように撃剣・剣術から剣道へ、弓術から弓道へ、そして武術から武道へという形で形成されたと考えられる。

〔4〕殺人剣から活人剣への移り変わり

活人剣とは・・・活人剣も殺人刀もただその生命を絶つかどうかの問題ではなくて、人を生かすか殺すかの心の持ちよう、刀の使い方の問題である。柳生心陰流には「一殺多生の剣」というのがあるが、一人の悪を断ち一人を殺しても多くの衆生を生かすのが活人剣であり、いわれなき殺生をするのが殺人刀である。

武道における道の概念を精確に把握するためには、もう一つの歴史的事実について検討しておく必要がある。それは武士集団同士が覇権を争った戦国時代（15 世紀後半から 1603 年頃）に生まれた流派武術が、江戸時代（1603-1867）の平和のなかで変質してくる過程で芸道的な道の概念が一般化してくるからである。戦国時代、戦争における戦いのための武術は各種武器術を総合的に扱う必要があったが、次第に専門化して、弓術、馬術、剣術、槍術などの流派を形成していく。江戸時代に入ると戦乱は治まり、権力を奪取した武士階級は、自らの権力の源泉である武力と武術の意味付けをする必要に迫られた。権力を維持するために武力は必要だが、平和の実現によって、現実的にはそれを行使する場面がなくなったからである。万一の戦争の危機に備えてということだけでは、支配階層である武士が武術をおこなう理由付けとして十分ではない。この時代の要請に応える思想が、柳生宗矩（1571-1646）の『兵法家伝書』（1632）で展開された「活人剣」の思想である。

柳生宗矩は、徳川家康の覇権を確立した関ヶ原の合戦以後、後の三代将軍・徳川家光の側近となり、将軍家剣術師範となり、ついには大名を監察する大目付となって、大名に列せられた剣術家である。『兵法家伝書』は、進履橋、殺人刀、活人剣の三部で構成される。進履橋は新陰流の技法をまとめあげた目録で、解説も加えられている。殺人刀と活人剣は、宗矩とその父・宗厳の二代にわたって工夫された技法、心法上の理論的体系を詳述している。柳生宗矩が記した次の文章に、活人剣の思想が現れている。

「乱れたる世には、故なき者多く死する也。乱れたる世を治めむ為に、殺人刀を用いて、已に治まる時は、殺人刀即ち活人剣ならずや。ここを以て名付くる所也」

（訳：乱世には、理由なく多くの人々が死ぬ理不尽で悲惨な出来事がある。そこで乱世を収めるために殺人刀を用いる。乱世が治まった後は、殺人刀は人を生かす刀、即ち活人剣にならざるを得ない。即ち、平和な時代の刀のあり方として活人剣という用語を使ったのである）」

また宗矩は「兵法は人をきるとばかり思ふは、ひがごと也。人をきるにはあらず、悪をころして、万人をいかすはかりごと也。」

（訳：剣術が人を斬るためだけのものだと考えるのは、誤った考えである。人を斬るのではなく、一人の悪を殺して万人を生かすための計略なのである）

宗矩はここで、剣術（殺人刀）で悪を殺すことが沢山の人々を救うことになるとして、剣術の行使を正当化している。剣術の行使を正当化することは、武士に剣術の稽古をうながし、指導階層としての武威を増すことによって社会秩序の維持に貢献するだけでなく、武士の矜持を高めたであろう。それは江戸時代が求めた、武士を社会に定位させるための思想であった。“人を活かすための剣術”という「活人剣」思想の機能は、近代思想としての人権思想に適合することから、武士階級が消滅した近代以降においてなお、武術をおこなう人々に引き続いて価値的な意味づけを与え、その活動を動機付けたと思われる。

形としない打ち込み稽古（近世流流派剣術の主要稽古形式）…16 世紀末、剣術流派の流祖の直弟子たちは、有力大名に招かれて兵法師範に任命されている。この傾向は江戸時代に各藩において継

続、展開し、各流派はその教授法や伝承、記録を整備して発展していく。

また、各藩には道場と呼ばれるようになる私的な武術稽古場も登場し、武士は、武術とそれを通しての心身の鍛練、武士としての作法や心構えを学んでいく。幕藩体制が確立する 17 世紀中葉以降、幕府は他流試合、公許以外の仇討ちを禁止し、諸藩、諸師範がこぞってこれを禁止したこともあって、流派剣術は盛行した。近世の武士が武術を学ぶ意味は、武士としての義務、出世への期待以外にも、武士という戦闘者のエネルギーを単独で発揮するためには、仇討ちや喧嘩以外に方法がなかったことがある。それは法によって自力救済行為が否定された結果、紛争を自力で解決することが原則としてできなくなったからである。

近世における流派武術の修練は、「形」稽古（約束稽古）によっておこなわれた。木刀あるいは刃引きの刀を持って、攻撃側と防禦側とで定められた方式によって行われる稽古では、相手の太刀が届く瞬間の距離と時間、つまり間合いの取り方の優劣によって、実力の優劣が現れる。木刀が届くか届かないかのぎりぎりの間合いで勝負できるかどうかは、技の優劣と共に胆力の有無をも顕現した。定められた「形」を十分に習得するまで何年にもわたって修行するのが剣術稽古の一般的やり方であった。その過程で形稽古では、技法と胆力の同時的成長をはかることができる。そこに形稽古の特質があった。

しかし形による剣術稽古は、真剣勝負の世界ではないので、形稽古の精神を忘れて型にはまった仕事（routine work）として形式化し、見栄えや誇張が混入することを免れない。これに対応する工夫は、17 世紀前半には、形剣術の中でも袋しない（撓）の使用によってなされていたと思われる。しかし、18 世紀、正徳年間（1711-1716）に直心影流の長沼四郎左衛門国郷が、防具の改良工夫に努力し、「皮竹刀」を用いて防具を着用した打ち込み稽古を開始したことや、一刀流の中西忠蔵子武が、宝暦年間（1751-1764）頃に防具を改良し、竹刀で打ち合う稽古方式を採用したことから、形稽古に加えて、竹刀打ち込み稽古（自由稽古）を行う傾向が増大した。

竹刀打ち込み稽古採用の理由は、中西忠蔵によると、「刃引木刀ばかりにては、強く打相こゝろみ難き事多有之、末々に至り、業弱く気相の論、或は禅言を用、剣術の物語に沈む物なり。」（訳：刃引きや木刀での形稽古では、危険で強く打ち合うことができない場合が多い。その結果ついには、技が不十分で、気について論じたり、禅語を用いて剣術論を独善的に云々する空論になる）などであった。

竹刀を刃引きや木刀のつもりで用いて、思い切って打ち込む稽古によって、実戦性も確保できると考えたのである。この方式は、競技性のもつ面白さも手伝って、武士のみならず豊かな町人や農民の間にまで盛行し、幕末にまで至るのである。竹刀打ち込み稽古方式による剣術は、明治時代に入って撃剣の名称で普及し、その言葉は 1926 年に体操科の教科名が剣道に改正されるまで続いた。

こうして形稽古と竹刀打ち込み稽古（自由稽古）という、二つの稽古形式の変遷の概略を理解するのであるが、注意しなくてはならないのは、竹刀打ち込み稽古の修行者も、実戦においては腰に差した刀で行う以上、刀の操法を教える形稽古を抜きにすることは考えられなかったことである。

竹刀打ち込み稽古が広まっても、「撃剣などは百姓がするものだ」として、武士の誇りを高く持ちながら形稽古を続けた者も少なからず存在したであろう。形と竹刀打ち込み稽古は剣術の修行法の両輪であった。近代の柔道では形と乱取り稽古の二つがこれに対応した。近世の柔術においても、「天真流剛術伝書（写）」には、「此業定レル現術ハ無之、柔術数十手表裏之形ヲ習、且捕合修行之後、臨機応変活用之修行ニ而前後左右トナク、順逆捕合必法ニ泥ム事ナリ」とあるように、少なくとも 1820-1830 年代には乱捕が成立していた。約束された形と、自由意思で競う自由稽古との二つの稽古形式は、他の武道でも重視されており、武道修行の特性であった。

### 近世流派武術における道の思想

宮本武蔵の『五輪書』（1645）には、「兵法の道」、「諸芸諸能の道」というように道の語が頻出する。その場合、道の意味が、方面、分野を指していることは明確であり、こうした用法が、当時人口に膾炙していたことが知られる。問題は剣術に代表

される武術の道の内実にある。前節では技法について見たので、本節では心法について考える。

武士に一義的に求められたのは武術の習練であったが、流派の伝書においては心法論の記述が中心を占めた。『兵法家伝書』には勝つための技法論と心法論が展開されている。しかし『兵法家伝書』進履橋に「師弟立相ひ、教ふべく習ふべきを以て、委曲を書述ぶるに及ばず。

(訳：師弟が実際に教え習うべき事柄であるので、詳細を書くべきはない)

とあるように、技法の詳細は記されていない。

術技の詳細を書くことが難しかったのと、武術の秘法性の故であろう。同じく殺人刀で示されているのは、合戦において勝つための心得、治世の際の役人人事、人との交際の眼目、徹底した剣術修行を経てはじめて到達する無心（物事に執着しない）の境地、また剣術のかけひきにかかわるさまざまな心法論であり、同じく活人剣では、剣術の心法論が禅にかかわっていっそう強く展開された。 その心法論を総括する言葉が、「平常心是れ道」である。唐代の名禅僧古徳（馬祖道一）の語った言葉を、宗矩は「常の心」という。この心なしに、弓、太刀、筆、琴などを遣おうとする心があれば、それらは乱れるとし、「一筋是ぞとて胸にをかば、道にあらず。胸に何事もなき人が道者(訳:何かを一途に思うのは道ではない。心に何もおかないのが道をわきまえた者である)」と述べている。弓で的に当てようとする心、太刀を工夫して戦おうとする心の段階を、心が何かに執着している心、すなわち囚われている心だとして否定した。対して、何事にも囚われない自由な境地である「常の心」あるいは「無心」に至った人のことを「道者」であると評価した。ここにおいて道は「常の心」を獲得する道程であると同時に、到達点としての至高の境地、仏教にいう悟りであったと思われる。周知のように、剣術家・柳生宗矩のこのような思想に影響を与えたのは禅僧・沢庵であった。沢庵は、その著『不動智神妙録』で同様の教えを「不動智」のはたらきとして説き、これを宗矩に与えている。宗矩は、悟りに至る道程を剣術の道として措定し、それを禅語である平常心や無心とともに世俗の言葉「常の心」と表現することによって、剣術を、禅を媒介とする神秘主義として性格づけたといえよう。

このような禅と武術の関係の議論に先行するのは、禅と芸能、すなわち、能、歌道、茶の湯、俳諧等との関係である。唐朝に興隆し、宋朝に至って発展した禅宗を 13 世紀の日本に伝えたのは栄西である。武士の棟梁たちの支持によって禅僧間の国際交流によって、禅宗は仏教界に独特の一派を形成した。禅宗は浄土真宗や日蓮宗と共に室町時代（1392-1573）には制度化あるいは世俗化され、その過程で、殊に禅宗が決定的な文化的役割を果たすことになる。加藤周一によれば、禅宗の世俗化の代表的な例は、14、15 世紀の五山（鎌倉幕府が定めた禅宗の最高寺格の五つ）の詩文の隆盛と水墨画の発達、また 16 世紀にあらわれた簡素静寂を重んじた茶の湯の一つ、侘び茶である。喫茶の習慣は中国から輸入され禅宗寺院（殊に大徳寺）で発達した。殊に茶の湯（茶道）は、15 世紀から 16 世紀にかけて、独特の建築（茶室）、書画（掛け物）、生け花、陶芸（茶器殊に茶碗）、そして社交的会話の全体を含む一種の総合芸術に発達した。武士は、茶の湯において禅僧や諸芸の名人ら上流階層の人々と出会い、禅的な思想を内面化していったと思われる。

一方、技芸における極致としての無心の教えは、そのまま荘子の「道（タオ）」の教えでもあった。『荘子』養生主第三の庖丁解牛の故事には、技を褒められた庖丁が、技の背後にあって技を活かすものとしての道の存在を主張している。『荘子』は江戸時代中期に受容され、例えば、佚斎樗山の『田舎荘子』（1712）で『荘子』を翻案し、啓蒙書として流布したことから広まった。『田舎荘子』所収の「猫之妙術」の寓話は、『荘子』の木鶏の寓話に仮託したものであろうが、戦いにおいて「無心」の状態にある者の強さを語ったものとして、山岡鉄舟ら幕末の剣豪に愛読された。老荘思想の研究者福永光司によれば、「わが国におけるさまざまな技芸、技術、芸能が、例えば茶道、書道、柔道、相撲道、修験道、歌舞伎道などのように、本来は「技」もしくは「術」、「法」とよばれていたものを特に「道」とよびかえるようになるのは、老荘の「道は技より進めり」- 技を根底から支え、技を技として活かすものは道であるという技能の哲学に基づく」と、道教の立場から結論づけてい

る。

以上から、江戸時代に、禅と芸能の影響、そして道教的考え方の浸透は両者相俟って日本武術の中に多様な形で入り込み、武術に対する認識を、術すなわち技とは異なる精神的境地を表す言葉としての「道」の意味を含むものとして強くしていったものと思われる。

## 第三章　剣道のグローバル化

### 〔1〕文化や宗教などによる諸外国での「剣道」の考え方の違い

日本の剣道の礼法の考えとして相手の人格を尊重し、心豊かな人間の育成のために礼法を重んずる指導に努める。剣道は、勝負の場においても「礼節を尊ぶ」ことを重視する。お互いを敬う心と形の礼法指導によって、節度ある生活態度を身につけ、「交剣知愛」の輪を広げていくことを指導の要点とするとある。

例としてアラブの指導方法や問題点がいくつかある。はじめに、座礼がある。

剣道は「礼に始まり、礼に終わる」といわれ礼儀が重要視されている。これは封建時代のように上下関係を明らかにすることではなく、横の人間関係から相互協力な立場に立って相手の人格を認め、それを尊重する態度より出発し、互いの理解と協力によって成立しているといえる。しかしアラブ社会において多数の者が座礼を行おうとしない。イスラム教における宗教的義務に五行というものがあり、もっとも大切な礼拝の形が座礼に似ており、礼拝はアラーに対する敬服の証しであり、誠心誠意をもって祈願する表現であり、この礼拝が交流唯一の方法であり、アラー以外に対して礼拝することはないので、剣道の礼法であろうと強制することはできないので礼法における形に工夫が必要である。

2つ目に格闘性がある。日本の考え方は竹刀で撃ち合うことで感情的行為にならず、相手を尊重する立場から礼儀を重んじることを重視されているが、アラブでの指導の際は相手に打ち込むことに興味を持ち、相手を打ち負かし優越感を感じる気質がある。よって礼儀作法を重んじ、感情的にならず形を崩さず正確に打つ剣道を理解させることが重要である。

などのことから、国ごとによって宗教観、民族観などによって剣道における考え方などに違いが出てくることがある。

### 〔2〕グローバル化の問題点

武道のグローバル化の中で、「日本の伝統的文化としての武道が変容してしまう危機感」を多くの武道実践者や研究者が抱いてる。

その象徴的事例が五輪での柔道競技の判定や海外選手の戦い方に対する日本側の反応である。剣道の国際大会にて起こる審判の誤・異判定問題への反応も、その根に同様のグローバル化による危機感が強く見られる。

剣道界は現在、前章でみた文化の質を巡る問題のほかに、二つの大きな問題に直面している。一つは、オリンピックとの関係をどうするか、他は、韓国剣道界の台頭による日本剣道の相対化にどう対応するか、という相互に絡みあった問題である。先の日本武道学会大会シンポジウムでの全日本剣道連盟副会長・福本修二発言によると、国際剣道連盟（FIK）は、IOC の認定国際連盟 GAISF（国際スポーツ連盟連合）に加入、承認された。これによって柔道や空手道、そして中国の武術太極拳同様に IOC 認定の国際連盟に認められたのである。オリンピック競技化への一歩の前進とも受け取れるが、事態は複雑である。世界の剣道界は日本を拠点とした国際剣道連盟が取り仕切ってきたが、韓国に世界コムド（KumDo = 剣道）協会（WKA）が最近発足し、その目標にコムド（剣道）のオリンピック競技化を掲げた。アレキサンダー・ベネットによると、WKA 発足がもたらしたものは、「強い剣道」（競技剣道）対「正しい剣道」（伝統的な修行法としての文化）の討論に再び火をつけた。オリンピック競技化はスポーツ競技の頂点であるが、日本を中心とする多くの剣道家にとっては魅力がないと考えていたところに、韓国で発生した剣道 KumDo のオリンピックイニシアチブが、剣道を考え直す契機となっているというのである。2002 年の段階では、FIK の役員また世界各国の日本風剣道愛好家の多くが一般的にオリンピック化を避けるべきだと考えていたにもかかわらず、FIK の GAISF 加盟は、こうした動向に対応して日本剣道のオリンピック競技化へ一歩踏

み出したとも理解できる。 剣道は互いに竹刀をもって有効打突を競う対人競技である。全剣連が定める今日の有効打突とは、「充実した気勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるもの」である。この規定は戦前（1927 年）の大日本武徳会の規定「撃突は充実した気勢と刃筋の正しい技法及び適法なる姿勢をもってなしたるを有効打突とする」とほとんど重なり、剣道家によって、近代以降の剣道文化の核心部と理解されていることがわかる。しかしこの有効打突はその求め方によって、上述の「強い剣道」あるいは「正しい剣道」に分かれる。前者はずる賢く卑怯な剣道だが、強く、後者はフェアプレーの精神で、技を大きく真っ直ぐに繰り出す剣道だが必ずしも勝てない。 日本剣道の現状について外国人剣道家ベネットの眼は鋭い。ベネットは、国際剣道経験と調査を踏まえて、日本剣道の現状を以下のようにとらえている。「外国人剣士は、日本人に教えられている『正しい剣道』と実際日本でやっている『強い剣道』のはっきりした矛盾を痛切に感じ始め、不満が高まってきている。日本剣道の現状は、いくら『正しい剣道』の理想を強調しても、実際のところは勝利主義的であり、試合で勝つことを最大の目的にしている指導者・現役は多い」と。全剣連は、剣道のオリンピック競技化への大きな流れの中で、技を競う競技という試合剣道の本来的性格から、「正しい」と信ずる剣道のあり方を考えていくことになる。

以上、簡単に日本の代表的武道である柔道と剣道の抱える核心的問題を述べた。では、武道のグローバル化によって引き起こされる問題は何か。最後にそれへの対応について考察する。

武道文化の伝統性を大切に思う人は、グローバル化の中でもその伝統性を維持しようとして、例えば、オリンピックに向けた競技化を回避するような選択をすることが考えられる。この選択も一つの見識というべきだろうが、問題もある。それは、関係者が自己の信ずる「道（＝価値）」に熱心なあまり、独善に陥りやすい点にある。世界に広く普及している合気道は、柔道、剣道と異なり乱取り試合をしない「形」。それに対して関わる NPO 法人日本合気道協会の合気道は形と乱取り試合の両方を併行して行うため、形よりも試合の重要性を強調することが多い。しかし、試合を安全に楽しめる年代が過ぎ、形稽古の割合が増大するにつれ、乱取り試合中心の稽古ではどうしても獲得することの困難な技法がより鮮明に見えてくる。形稽古で獲得される技法は、確かに乱取り試合で応用することが可能であるが、乱取り稽古では学ぶことのできない格闘の様々な要素が見えてくるのである。合気道を含む武術・武道は、体験によって初めて認識される文化性をもつ。そのことはまた、新たな体験によって当該武道の認識が変わりうることをも意味している。さまざまな言説が飛び交えば、必然的に摩擦が生じる。このことは、文化性の内容やあり方をめぐる他者の意見に対して寛容であることの必要性を教えてくれる。同一文化圏内部の意見はもちろん、外部の意見にも充分に耳を傾けて、グローバリゼーション時代に対応しなくてはならないだろう。以下、こうした精神で、具体的な問題を考えてみる。

礼儀の問題として近世以降の日本武術・武道の思想的特性として「活人剣の思想」を指摘し、それを「近世武家社会における剣術の正当化」と意味づけ、「近代以降においてなお、武術をおこなう人々に引き続いて価値的な意味づけ、その活動を動機付けた」と考察した。現代武道の稽古に伴う礼儀作法は、現代日本社会における武道の社会化という意味での正当化を意図したものと理解することができる。以下では、この問題を採り上げて考える。

実際、日本人、外国人にかかわらず、武道を始めた動機に、「礼儀正しい」身体の所作を上げる人は多い。日本の親が武道に期待する理由の多くは、子供に礼儀を身につけさせたい、ということである。これは剣道や柔道の道場においてしつけられる礼儀の風習は、稽古前後のプロセスを越えて、稽古場以外で出会った際にまで及ぶと期待されるからである。

しかし一方で、武道と伝統の礼儀の関係は、吉田松陰『武教全書講録』の「敬は乃ち備［え］なり」、「武士たる者は、行住坐臥、常に覚悟ありて油断なき如くすべし」という言葉からその意味をよく理解することができる。敬という言葉に込められた精神性が備えの技術性に結びつくときに、初めて生きてくる教えである。近世初期の朱子学者・

林羅山は、聖学の要を「敬」、即ち心の内外にわたるつつしみであるとした。羅山はまた「道徳仁義礼にあらざれば成らず」と述べて、礼儀の正しさが、他者に畏敬される強みとしてあらわれることを述べた。そうした態度が、技によって裏打ちされると、相手を敬うことを態度で示しつつも、不意の攻撃や裏切りなどの不測の事態に対処するための技と心の構えとなるのである。したがって武士における礼儀には、ある種の緊張感を伴う重み、即ち威儀が備わっているといえよう。それは尊い民族文化の成果といえるかも知れない。世界にその思想と方法を広める価値があると信ずる。しかし、同じ文化の中で育たなかった人々が、この日本文化をどのように評価するかは一概にいえないだろう。日本も国際化し、2006 年 10 月の外国人登録者数は約 208 万 5,000 人に及び日本に居住している。多くの人が日本社会と文化に溶け込もうとしているとしても、礼法という文化を押しつけることは避けなくてはならない。

同様の問題だが、さらに考えなくてはならないのが、海外に普及した武道を、どこまでコントロールするかという問題である。海外に伝播した武道であっても、民族文化として「正しい」武道を普及するのだという思いは関係者に強い。その文化に育まれた者にとっては、当然のことであろう。しかし、異文化圏に入った自文化を、そこでそれぞれの意図で懸命に取り組む人々の主体性を無視して、いつまでも直接コントロールしていこうとする姿勢は適切だろうか。

日本は外来文化を非常に広く受け入れる、世界でも珍しい社会であるが、同時に、「日本の文化の特性として、外来文化を自分たちが必要だと思うところは全部取り入れてしまうが、そうすると本来の文化が持っていた形を全部なし崩しにして自文化に同化させてしまう、あるいは消化してしまうところがある」と、日本文化の非常に開かれた受容性と、同化あるいは消化による閉鎖性が同居している二側面を指摘し、それが国際化で苦しんでいる大きな理由である。

### 〔3〕韓国剣道 KUMDO について

そんな中、日本文化であると疑わなかった『剣道』、それを近年韓国側が剣道の起源は韓国にあると主張している。

韓国起源説にはいくつかの理由が挙げられる。

はじめに、文化抹殺説。韓国起源説や「日本人の野蛮性」という認識を補完する主張として、「日本による韓国文化の抹殺・略奪説」がある。日韓併合時代や文禄・慶長の役の際、日本が朝鮮半島の文化・文化財をことごとく抹殺・略奪したというもので、「現代の朝鮮半島に存在しない文化も、日本に抹殺・略奪される前には存在したはずだ」との前提で、多くの韓国起源説が主張されている。例に折り紙などがある。また剣道や柔道のように、日韓併合時代に日本が韓国に伝えた文化についても、「韓国に本来あったはずの伝統様式こそが日本様式の起源であったが、日帝によって抹殺され日本風に強制的に改変された」と主張し、呼称・服装・作法などを韓国風に改変し韓国起源説を主張する場合がある。

次に逆韓国起源説である。「先進的で文化的で優秀な朝鮮と、未開で野蛮で劣等な日本」という認識は、「高名な日本文化は、朝鮮半島起源」という韓国起源説とともに、韓国国内で見られる好ましくない文化は日本統治時代の朝鮮に導入された劣位文化（倭色）であるとする考えが浸透している。

### 韓国剣道のナショナルチームの剣道に対する意識として

韓国において、剣道は警視庁（1896）や陸軍研成学校（1904）の撃剣教育として日本から導入されて以来、学校教育の成果科目（1911）や必修科目（1927）になり学校教育として定着した。しかし、戦後反日感情が高まり日本の文化や教育が除外される中、剣道も公立学校体育から除外されることになった。

その中で剣道はスポーツか武道かという質問に大学生は武道という声が多かったが、ナショナルチームはスポーツであるという声が多かった。剣道の経験が長いほど武道という意識が高まり、ナショナルチームの選手はほとんどが実業団のプロ選手であり結果を重視し、勝ちにこだわることでスポーツ的に捉えるようになったと考えられる。

だが剣道だけでなく、「武士」「日本刀」「武士道」もすべて韓国起源だと主張している。しかし、

剣道は日本統治時代に韓国に入って来た日本起源のもので、朝鮮半島でもともと使用されていた刀も、中国とモンゴルから伝わった両刃の剣や「環刀」と呼ばれる直刀で、日本刀を基礎とする剣道の誕生とは結びつかないと「韓国起源」説を否定している。

## 終わりに

日本文化の変容の方向性を見通すことはそう容易ではないが、グローバル化は世界中の文化接触を生んで止まない。日本は早晩、国の内外を問わず各種の文化の変容を迫られることになろう。武道を愛好する者も、我々の孫子の代で確実に問われるこの問題に、覚悟を固めて対応する必要があると考える。

第一に、武道の文化独自性とは何かを理解し、その中で後世に伝承し、発展させるべきものを、国際化の現実を広く見据えた上で、確認することである。武道の独自性を確認することとは本質を見出すことではない。個人の責任における文化的価値へのコミットメントなのである。従って他者によって歪められたと考えられるリスクを避けることはできない。その適切性には教養が求められている。

第二は、海外に伝わった場合である。オリンピックにおける競技スポーツは、世界共通のルールの下でしか存在のすべがなく、武道の文化的伝統性と近代的精神との折り合いを話し合いによってつける必要がある。他方で、文化的伝統性を維持できる部分が非競技的な形稽古の部分である。この面での研究と文化の質の維持はなされなくてはならない。それは異文化交流の時代に生きる人間が、自らの責任において価値にコミットしていくことである。同時に、数百年という長期的展望で考えれば、伝統武道の変容に対して寛容の精神をもつべきであろう。文化のコントロールには自ずから限度があるだけでなく、その民族や風習にあった変容に理解を示すべきである。日本人は多様な異文化が飛び交う中で育って来なかったから、その理解と評価が困難であるからである。決定権はその地に住む人々にあると思う。寛容の精神は他者への思いやりであり、異文化理解の努力の中から生まれる。ここでも幅広い教養を高めておくことが要求されると考えられる。

### 参考文献

三島由紀夫（1983）葉隠入門　新潮文庫
山本博文（2001）「葉隠」の武士道 誤解された「死狂い」の思想　PHP 新書
蝦名賢造（1986）新渡戸稲造 - 日本近代化と太平洋問題　新評論
須地徳平（1983）　新渡戸稲造の生涯　熊谷印刷出版部
加来幸三（2003）「宮本武蔵」という剣客　日本放送出版協会
魚住孝至（2002）宮本武蔵－日本人の道　株式会社ぺりかん社
永井義男（2013）剣術修行の旅日記　朝日新聞出版
佐江衆一（2006）剣と禅のこころ　新潮社
伯崎克彦（2007）現代武道の諸問題―武道の国際化に伴う諸問題―
志々田文明（2008）武術・武道の「国際化」と文化変容に伴う諸問題
金 炫 勇 .（2010）韓国剣道ナショナルチーム選手の剣道に対する意識
高橋進（1986）東洋における「道」の思想と日本武芸論について
田中守（2007）剣道における競技と人間形成